

## わたしの戦争体験

粕屋郡古賀町 市原 洋太郎

昭和20年8月、太平洋戦争が終結したとき、私は国民学校の3年生であった。

少年期に入ってまだ幾年も経ていない私に、戦時中の世界の情勢や、戦争のなりゆきなど、理解できるはずがなかった。

私は、終戦の間際まで長崎市銭座町に住んでいた。家族は両親に妹と弟の5人暮らし、父は長崎機関区に勤める鉄道員であった。

もし、私たちが8月9日まで長崎に留まっていたならば、現在、こうやって平和で豊かな日々を過ごすことは叶わなかったであろう。

いま、あらためて人間の運命について思いをめぐらしている。意志にかかわりなく、身の上にめぐってくる吉凶禍福。人生は、天の命によって支配されているのだろうか。

あの終戦の年、長崎に於て、原子爆弾の洗礼を受けていたかもしれない私が、今、元気で生きている。

運命の日の幾日か前に、田舎への疎開をせかせてくれた救いの神があったからこそ、命が助かったような気がしてならない。

生かされた者のつとめは、再び戦争の惨禍をくりかえさないため、体験したことの数々を、若い世代に語り継ぐことではあるまいか。

私が、国民学校入学のときを迎えたのは、昭和18年の春のことである。この当時、私たちの住む長崎では、空襲に怯えるようなことはなかった。

寅歳の生まれである母のところへは、戦地におもむく兵士のための「千人針」がよく回ってきていたという。

この頃、私も上級生といっしょに、零式艦上戦闘機や、隼戦闘機などの模型を作ったりして、くわしいことはわからないまま、大人たちにならって、戦意高揚につとめていたのかもしれない。

昭和19年の7月から8月にかけて、マリアナ諸島で日本軍が相次いで玉砕したこと。そして、国民総武装が決定され、竹やり訓練が始まったことや、10月に神風特別攻撃隊が初めて出撃していたことなど、ずっとあとになって知ったことである。

昭和20年6月、沖縄の日本軍が全滅した。やがて、昼夜の区別なく空襲が激しくなってきた。

私の家を境として南側一帯の人たちには、強制疎開が命ぜられ、建物は次から次へと壊されていった。

灯火管制下の不自由な生活を強いられ、防空頭巾を手離せない毎日がやってきた。防空壕は、

私の家の裏手の、少し高まった邸宅の庭に掘られていた。

警報が発令されるたびに防空壕へ避難するのが、生活の一部となってしまった。空襲に明け暮れる異常事態の中で、学校での勉強は一向にすすまなかった。

ある暑い日、警戒警報に続いて空襲警報が発令された。間もなく、不気味なエンジン音を轟かせて、敵機が侵入してきた。

そして、爆弾を投下した。その爆弾は、私たちが避難していた防空壕から南へ100mほどの商家を直撃した。大きな爆烈音とともに、凄まじい風がまきおこった。壕の入り口を塞いでいた鉄製の扉が吹っ飛んだ。

壕内の空気が激しく揺さぶられた。叫び声があがった。悲鳴もきこえた。

被爆した商家の焼け跡から、2人の遺体が掘り出されるのを見た。子供心に悲しく思った事を覚えている。

このような日々にあって、身に危険が迫りつつあることを悟った私たちは、父ひとりを残して長崎を離れることにふみきった。

疎開先は、熊本県の山間部、福岡県との境に近い玉名郡神尾村（現三加和町）というところ。そこは、祖父母の故郷であり、農家の親戚も多かった。

長崎に住んでいた祖父母は、すでにそこを引き払って、田舎に家を構えていた。

私たちを祖父母のところに送り届けた父は、とんぼ返りで長崎へと帰って行った。

父のうしろ姿を見送るとき、これが父との永遠の別れになろうなどとは、私たちの誰もが思ってもみないことであった。

昭和20年8月9日、午前11時2分、長崎に、広島に次いで世界で2発目の原子爆弾が投下された。

その日の午前3時前、原爆搭載機B29は、主要目標小倉をみざして、テニアン基地を発進していた。

予定どおり小倉上空に達したものの、雲が厚く視認できなかつたため、第2目標の長崎攻撃に転じていた。その時、長崎の空は晴れていたという。

雲の厚さが、長崎と小倉の、明暗をはっきり分けたといえる。

長崎に新型爆弾が落とされたことを、田舎にいた私たちが知ったのは、そのどのくらいあとだったか覚えていない。

かつて、警察官として勤めていた祖父は、大急ぎで長崎へと出向いて行った。娘の夫、私たちの父の行方を探し出すために。

長崎になんとか辿り着くことができた祖父も、被爆直後の灰燼に帰したところからは、何ひとつ目ぼしい情報を得ることはできなかつたという。

父が、どこにいて、どうなったものか、知るすべさえなかつた。生存していたならば、どうにかして連絡があるはず。待つこと数週間、連絡はないまま、時間は空しく流れて行った。

私が通っていた銭座国民学校は、爆心地から南へ1.5kmのところにあつた。いっしょに学

び、そして遊んだ友ら500余人が、一瞬のつよい光を浴びて、この世を去っている。

現在、新しく建て替えられた校舎の前に、「子どもらの平和の像」があり、その像の台座に、次の詩文が刻まれている。

「忘れないで下さい／あの日の出来事を……／住みなれたふる里・銭座の町とともに／炎は私の髪の毛をやき／炎はぼくの目にかぶさり／生きながら苦しみながら／私はひとにぎりの灰になりました／私はいつも500余名の／銭座の子らの願いをこめて／ナガサキの空を飛びつづけます／忘れないで下さい／あの日のこと……」

戦やみ平和に過ぐる世となれど  
われは忘れじ「原爆の日」を